

浦賀文化

第81号

令和7年4月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

万延元年浦賀奉行所の台風被害

万延元年（一八六〇年）七月二十三日から二十四日にかけて浦賀は、にわか大風・大雨に見舞われた。

浦賀奉行所で船改めを勤めた下田問屋の記録である『諸御用日記』（横須賀市史学研究会編「浦賀書類（上）」所収）には、七月二十三日「昨夜より今八ツ時分迄大風雨」とあり、浦賀奉行所与力・同心、組頭へお見舞いをしたことや鴨居沖に出されていた海上を見張るための番船が難破したという記録がある。また、相州三浦郡大田和村の浅葉家に伝わる『浜浅葉日記』では「近年稀なる大水」とあり、道が冠水している様子や、近隣地域で屋根や壁が吹き飛ばされたり人家が倒壊したりしている様子が記されている。さらに、山が崩れ死者が出たなど、記録は断片的ではあるが大災害であったことを伝えている。

で）の大風雨で浦賀奉行所の関連各所での被害状況が箇条書きされている。これを大まかにではあるが紹介したい。

【浦賀奉行所内】外圍の板塀が三十軒（約五十五メートル）にわたって吹き飛び支柱と控柱が折れた。屋根瓦も所々落ちて雨漏りするようになった。焚出門が一方所倒壊、石垣が少々損傷した。表通りの胴壁が所々崩れ落ちて大破した。武器蔵、その他厩にいたるまで屋根瓦が落ち、壁が所々損傷した。

【支配組頭役宅】門が倒れ、外圍・中仕切板塀とも二十間余り（約三十六メートル）にわたり倒壊。柱・控柱も折れた。屋根瓦も落ちて雨漏りする場所ができ、土蔵の下見板も吹き飛んだ。

【船番所】番所内武器蔵の下り棟瓦が落ち、雨漏りする箇所ができた。鉢巻も落ちて壊れた。船屋の屋根瓦は吹き飛び雨漏りする箇所ができた。屋根向も全体的に損傷していて居所では雨漏りする。牢屋の屋根瓦も割れて全体的に雨漏りし、詰所の屋根瓦も吹き飛

んだ。外圍の柵矢来も残らず倒れた。

【各所台場】亀甲岸・千代崎・明神崎の各所台場で柵矢来が倒れ、屋根瓦が吹き飛び、あるいは割れて雨漏りが発生した。千代崎台場では与力・同心の詰所の屋根瓦や雨戸の戸袋が吹き飛ばなどし、通行道では山が崩れて通行不能となった。平根山遠見番所では屋根瓦が落ちるなどして雨漏りするようになり、建物の障子も残らず破れ、壁も損傷するなどした。

【その他】屋形（館）浦船屋で屋根瓦が吹き飛んだほか、細田（現浦賀一丁目）・足太の合葉蔵が大破、分穂（現西浦賀五丁目）にある与力・同心の屋敷付近の山が崩れ、空き家が三棟大破した。齋藤屋敷製薬所も屋根瓦が飛び、下見板が剥がれ柵矢来が倒れた。観音崎沖に出していた番船が損傷した。

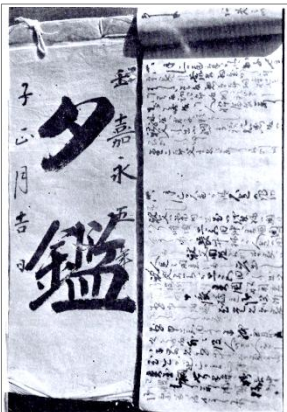
※控柱……塀が傾いたり倒れたりするのを防ぐ柱
※下見板……外壁の板
※鉢巻……蔵の軒下の部分

このように、奉行所の関連各所でも大きな被害に遭っていたことが窺える。浦賀奉行小笠原長儀は「捨て置きたい箇所が多いので修復させようとしたところ、昨年八月の台風で被害が

あった箇所を修復した時の費用が未だに幕府から下げ渡されておらず、棟梁たちが難渋している状況である。よって今回は牢屋敷だけ修復させ、その他は仮繕いなどしてそのままにしておく。」として牢屋敷以外の修復を保留することになっている。

幕府から費用の下げ渡しが無かったのは、自然災害の頻発やコレラの流行など多事多難の時期で緊縮財政を余儀なくされていたことがあったと思われるが、安政六年（一八五九年）の神奈川開港にともなう「浦賀」という場所の地位の低下もあったのかもしれない。

（山本 慧）



浜浅葉家に伝わる日記の表紙と記事
横須賀市史学研究会編『浜浅葉日記（二）』より

★参考文献

- 『九州大学蔵 近世浦賀問屋史料（二）浦賀書類（上）』 横須賀市史学研究会
- 『相州三浦郡大田和村浅葉家文書』 第三集 浜浅葉日記（三） 横須賀市史学研究会
- 『外国奉行事務付下田浦賀奉行事務』 東京大学史料編纂所蔵 外務省引継書類、40

俳句の散歩道

浦賀コミュニティセンター分館では、浦賀にちなんだ俳句や四季折々の俳句をみなさまから募り玄関に掲示しています。

平成二十七年（二〇一五年）に募集をはじめから、早いもので一〇年が経ちました。今までたくさん応募をいただき、玄関に彩りを添えていただきました。

近年投句いただいた作品の中から、優秀作品を数点ご紹介いたします。

海の藍真向く鋸山笑う

鈴木 ひろ

風光る少女の胸の白うさぎ

齋藤 ト石

子雀の止まぬお喋り谷戸の朝

五十嵐富美子

御座船の小さき旅に櫻舞い

中川 ミツ

山腹の夜ごとふくらむ薄暑かな

齋藤 ト石

紅薄く引いて残暑のマスクかな

五十嵐富美子

風鈴に一人じゃないと願いかき

中川 ミツ

潮の香や始発駅いま合歓咲けり

鈴木 ひろ

信濃路や空に染み込む柿の赤

五十嵐富美子

秋入日栄華を偲ぶ浦賀港

大塚遊球子

野分来て港の渡船身を細め

鈴木 ひろ

亡き人の顔みなやさし柿紅葉

齋藤 ト石

風寒とプールにおどるさざ波や

中川 ミツ

冬夕焼渡船の水脈を染めにけり

鈴木 ひろ

犬の鼻ぬれてやはらか冬うらら

齋藤 ト石

カラカラと右に左と枯れ落葉

五十嵐富美子

初針や妣のまねして糸さばき

鈴木 ひろ

カフェラテのかくまで甘し福寿草

齋藤 ト石

初日の出とばす吟詠綺羅の海

五十嵐富美子

引き続き募集を行ってまいります。
みなさまの投句をお待ちしております。

Dock Café 9

終戦直後に海軍出身の社長だった堀が辞任し、後任として甘泉豊郎が十代目の社長に就任した。敗戦により海軍が解体されると、浦賀ドックは賠償工場の指定を受けることとなる。指定期間中は、機械設備等が差し押さえとなり、それらを自由に使えないことから会社再建計画に支障をきたした。さらには、インフレや労働組合の賃上げ交渉の活発化なども重なり、経営はたいへん厳しい状況に追い込まれていった。この賠償工場の指定は、工員たちや地域社会にとっても生死をかけた大問題であった。そして三年後、町をあげての解除請願運動がようやく実を結び、賠償工場の指定が取り消されることになる。これにより、浦賀ドックはようやく会社再興に向けて動き出すこととなった。戦前までの日本は海運国として英米に次ぐ世界第3位の地位を誇っていたが、敗戦後は第12位にまで転落してしまっていた。戦後の混乱期にありながらも、甘泉、その後を継いだ多賀は、浦賀ドックを再び世界に羽ばたかせるため、次々と起こる戦後処理の難問題に立ち向かっていった。彼らの努力の成果がその後の浦賀ドック復興への大きな原動力となった。

(江)

